歴史的事象から自分たちとの関わりを読み取る学習に関する研究
― 授業実践「十字軍から得るべき教訓とは」を通して ―

県立豊橋東高等学校　服部　良太

1 研究のねらい

本校のスクール・ポリシーの育成を目指す資質・能力に関する方針の一つに「深い知性と創造性があり、高度情報化やグローバル化した現代社会に貢献する人」が掲げられている。本研究では、十字軍を題材に、異なる立場や価値観をもつ人々の関係に着目し、歴史的事象を多面的・多角的に考察する力を育成することをねらいとした。

本校の生徒は学習意欲が高く、グループ学習にも積極的に取り組む一方で、答えが１つに定まらない課題に粘り強く向き合うことや、協働して論理的に考察する力に課題がある。そこで、目指す生徒像を「協働的な学習を通して、異なる立場の人々の関係に着目し、歴史的事象を多面的に捉え、自分の考えを形成できる生徒」と設定した。十字軍を通して、対立だけでなく交流や相互理解の側面にも目を向け、多様な視点から歴史を考察する単元を構想した。また、異なる他者同士が関わるときに起こった問題点やそれを克服した事例の探究を通して、歴史的事象から現代に生きる自分たちに生かせる教訓を導き出すことを目標とした。

2 研究の実際

（1）単元指導計画

科目名	世界史探究	学年・類型	２年・文系	単位数	3
単元名	イスラーム世界と中世ヨーロッパ この単元は、「C　諸地域の交流・再編」の「(2) 結び付くユーラシアと諸地域」に該当する。				

単元の評価規準		
知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
イスラーム世界と中世ヨーロッパの政治・社会・宗教・経済の特徴と相互交流の実態を理解し、関連資料を適切に読み取り活用している。	十字軍や交易・文化交流を通して、イスラーム世界と中世ヨーロッパの背景ついて、多面的・多角的に考察し、根拠を明確にして表現している。	

次	授業のねらい・学習活動	重点項目 ※1			評価方法
		知	思	主	
1	ねらい「アッバース朝の解体の原因・影響について考察する」 ① イスラームの中心地となったカイロについて考察する。		●		ワークシートの記述
2	ねらい「各地のイスラーム王朝の成立について理解する」 ② 地域ごとにイスラーム諸王朝の位置・特徴を整理する。	●			ワークシートの記述
3	ねらい「イスラームの社会・文化について理解する」 ③ イスラームの商業・文化の特徴についてまとめる。	●			ワークシートの記述
4	ねらい「商業と中世都市の発展について理解する」 ④ 地中海商業圏と北ヨーロッパ商業圏についてまとめる。	●			ワークシートの記述
5	ねらい「教皇権の伸長と十字軍について理解する」	●			ワークシート

	⑤ 教皇権の伸長の展開について理解する。				の記述
6	ねらい「十字軍の教訓について学習する」 ⑥ 十字軍の目的と実際について考察する。 ⑦ 十字軍から他者との関わりについて何を学ぶべきか考察する。		○		グループ学習・ワークシートの記述
	定期考査	○	○		

※１　指導に生かす評価には「●」を、評定に生かす評価には「○」を付す。

（2）第６次の評価基準（ルーブリック）

	A	B	C
思考・判断・表現	異なる立場の関係に注目し、十字軍を多面的に捉え、他者との対話を踏まえながら、根拠をもとに自分の考えを論理的にまとめ、表現している。	異なる立場の関係に注目し、他者との対話を踏まえながら、根拠をもとに自分の考えを論理的にまとめ、表現している。	異なる立場の関係に注目し、他者との対話を踏まえながら、根拠をもとに自分の考えを論理的にまとめ、表現していない。

（3）授業デザイン

ア　二つのグループ学習

手だて１として二つのグループ学習を行う。第６次の第１時では、十字軍の一般的イメージを確認した上でグループワーク１（別添１-①）を行う。グループ学習１では、４人ごとのグループを偶数つくり、Ａ・Ｂに分ける。Ａグループは、キリスト教世界の資料（別添２）を基に十字軍の目的と実際について考察する。Ｂグループは、イスラーム世界の資料（別添２）を基に十字軍の結果や反応について考察する。さらに、ＡとＢが相互に考察した結果を伝達し、共有することで、複数の視点でみることの大切さに気付く。十字軍は聖地奪回などの宗教的目標を掲げていたが、実際は領地や経済的利益を目的としていたこと、主にキリスト教徒からムスリムへの虐殺や無理解が見られたことを読み取る。

第２時では、サラディン、フリードリヒ２世、アル＝カーミルの事例から、十字軍を別の側面から考察する。サラディンはイスラーム世界の君主でありながら、キリスト教徒への寛容を示し、できる限り衝突を避けようとした。グループワーク２（別添１-②）では、それぞれのグループへの質問項目が相手のグループの資料から読み取れるように設計した。フリードリヒ２世とアル＝カーミルは異なる世界の君主同士でありながら、偏見や敵対心を持たず、聖地回復を政治的問題と捉え現実的な交渉をまとめたことを、グループ内そして相手グループとの協働的な学習から考察する。

イ　振り返り

「(a)現時点での十字軍に対するイメージはどのようなものか　1(2)（学習前のイメージ）と比較してみよう。(b)学習を通して疑問に思ったことや今後考えてみたいはどんなことか。」という内容の振り返り（別添３）を行う。グループ学習において、過去の自分やグループの中の他者と対話することで十字軍のイメージがどう変化したか　　（または変化しなかったか）を問うことで、学習への粘り強い取り組みを測る。さらに、疑問点や学びたい内容を明確にさせるとともに、その解決に向けてどのような資料を調べるか、誰とどのように意見交換するかなど具体的な学習の進め方を考えさせる。

３　研究の実際と検証

【写真１　他グループへの説明】

まずは２つのグループ学習を通して、生徒は聖地奪回という宗教的理念だけでなく、領地や経済的利益といった現実的側面、さらにはイスラーム側の被害や受け止めにも着目するようになった。写真１のように、他グループへの説明を通して、同一の歴史事象でも立場によって評価が異なることに気付き、一面的な理解を修正する姿が見られた。

手だて２では、授業実施後、十字軍に対するイメージの変容についてアンケート調査を行った結果、85.7％の生徒が「変化した」と回答した。その具体的な変容内容からは、本時がねらいとした「歴史的事象を多面的・多角的に考察する力」の確かな高まりが確認できた。具体的には、当初抱いていた「聖戦」としての肯定的なイメージが、戦乱による被害等の側面を知ることで「否定的なイメージ」へと多面化するだけでなく、その発生要因をより構造的に捉え直す生徒の姿が見られた。例えば、十字軍の目的を単なる「宗教的動機」に限定せず、背景にある「政治的・経済的動機」との相関関係に着目し、事象を多角的に分析・結論付けた記述が数多く見られた。また、十字軍の歴史を通して、異なる立場や価値観、その背景などを深く学ぶことで、現代に生きる自分たちに生かせる教訓を得ることができた（資料１）。

【資料１　の振り返りの記述】

(a)現時点での十字軍に対するイメージはどのようなものか　1(2)（学習前のイメージ）と比較してみよう。
(b)学習を通して疑問に思ったことや今後考えてみたいはどんなことか。

(a)
学習前は ただ 信仰深いキリスト教の人々が 聖地を奪還するために
行った 宗教的な戦いであり、神への献身と"正義"のために戦った
イメージだったが、学習するにつれて 宗教だけでなく 政治的、
経済的な目的もあったことが分かり、争いには 様々な要因が必ず
絡んでいると学び、意外と戦略家なイメージをもった。
(b)
最初に思っていたイメージはぼんやりとしていて、先入観から判断していたが、
資料 や友達とのグループワークから新たに気づいた部分が多くあったので、
何事も多角的に見ることを意識しすべきだと思った。
このように歴史のことを深ぼりすると多くの教訓を得られ、
現代でも生かされるとわかったので これからは、ただ出来事を記憶するのではなく
なぜ の部分を大切に学習していきたい。

これは、異なる立場や価値観が交錯する十字軍という題材を通し、生徒が固定的な見方から脱却して、歴史の重層的な側面に粘り強く向き合った成果といえる。協働的な学習において多様な視点に触れたことが、自らの考えを論理的に形成するプロセスを支える有効な手立てとなった。

４　成果と今後の課題

（1）成果

２つのグループ学習から、目指す生徒像である他者との協働的な学習が実現できたと考える。授業では複数の資料を読み、それを表現するために話し合う場面がみられた。振り返りより、他者と協働しながら探究することを生徒自身も自覚できていた。

振り返りに対する考察から生徒が求める資質・能力を身に付けたと考える。８割以上の生徒が学習前と後で十字軍に対するイメージを変化させており、十字軍の目的や評価について新たな考えを身に付けた。歴史的事象に対するイメージの変化を問いかける手法は、歴史的事象を多角的・多面的を考察するのに効果的である。学習前のイメージを事前に記録し、教科書の記述や別の視点から書かれた資料を提示してグループ学習を行うことで、

自己や他者と対話しながら自分の考えについて深めることができた。最後に、学習後のイメージを比較し、考え方の変化を考察することで主体的な学習が実現できた。

また、十字軍の教訓を現代に生きる自分たちに生かせる場面を考える機会を設けることで、日常生活や異なる他者との関わり、現代の諸問題が挙げられた。多くの生徒が歴史的な事象から得た教訓を自分事として生かそうとする視点が獲得できた。「世界史探究」の大項目Ｅでは「地球世界の課題の探究」が設定されている。それ以前の単元から、歴史的事象から課題を解決する視点を育成することで、最終的な探究学習に円滑に移行できる。

（2）課題

本実践では、生徒が多面的・多角的に歴史事象を捉える力を高める成果が見られた一方で、グループ学習の設計と発問の在り方に課題が残った。まず、資料内容を他グループに説明・共有する活動を各時で実施したことにより、活動の意図は達成されたものの、移動や説明に時間を要し、授業全体の進行が停滞する場面が見られた。協働的な学びの質を維持しつつ、活動を効率的に進めるためには、グループ間の交流方法を精選し、同時進行型の説明活動など、時間配分を意識した構造的な学習設計が求められる。

また、グループ学習のまとめとして設定した発問については、「価値観の異なる他者との関わり方」という主題の重要性は高いものの、問いの設定がやや抽象的であったため、生徒の解答が類似した内容に収束しやすく、思考の広がりや深まりを十分に引き出すには至らなかった。今後は、歴史的事象から得られる教訓を現代社会の具体的な場面と関連付けて問うなど、より多様な視点や具体的事例に基づいて考察できる発問へと改善する必要がある。

さらに、協働的な学習によって得られた多様な視点を、個々の生徒がどの程度自分の思考として再構成できているかについても課題が残る。対話を通して得た気付きを個人の学びとして定着させるためには、振り返りや記述の機会を充実させるだけでなく、思考の過程を可視化し、教師が適切にフィードバックを行う工夫が重要である。

以上より、今後はグループ学習の効率的かつ効果的な運用、思考を深める発問の精選、そして協働と個別の学びを往還させる指導の充実を図ることが課題である。